

批評と紹介

口・ル・スネルグローヴ氏編著

「くーか・ル・タ・ル」
の批判的研究」

D. L. Snellgrove: *The Hevajra Tantra. A Critical Study. Part I Introduction and Translation, XV, 149 pp.; Part II Sanskrit and Tibetan Texts, XI, 188 pp.* SOAS Univ. of London, London Oriental Series Volume 6. London (Oxf. Univ. Press) 1959.

古　　画　　因　　藏

本書は「船かぬだら、第一船は世譜(p. 1-46)」¹と訳され、(p. 47-119) のほか、内容の摘要(p. 121-125)、マハタラ絵圖(p. 126-129)、特殊語の説明(p. 131-141)、および索引(p. 143-149) などである。第一船は梵藏对照のトヨベー(p. 1-101) と梵文の注釋から成るが、トヨベー・マーハー(p. 103-159) のほか、語彙(Select Vocabulary: Tibetan-San-

「くーか・ル・タ・ル」の批判的研究」

skrit-English, p. 161-177; Sanskrit-Tibetan, p. 178-188) を收めている。XII-XIII はそれぞれ第一部・第二部を指し、三箇の数字(例えば I. 1. 1) は梵文原典の個所を示す。

ヒュームー教關係のタハーラに出でて、佛教タハーラの梵文原典の出版は比較的少なく((cf. I, p. XIII-XIV; 山田龍城 梵語佛典の諸文獻 1959, p. 146-183))、その研究は近頃 G. Tucci 教授の努力によって大きく進展したが、この方面の學界は、根本資料の批判的出版・研究に期待するといふの甚だ多く。Buddhist Himalaya (Oxford 1957) などにてタントラ佛教に關する理解を示した著者が、本書によるて極めて重要な學術的寄與をなしたければ、深い感謝に値する。

タヒーラは種々に分類されるが、くーか・ル・タ・ル

ハ (Ku-ch'a-lu-ta-lu) は、その中の最上類(anuttara-yoga-tantra) に屬し、母尊くーか・ルの配偶が始める母妃が重要なる役割をもつたと、yogini-tantra は一種の母神像(p. 1, p. 30, p. 132, p. 138-139)。H・T は藏譯(Kyehi rdo rje rgyud, 東洋図錄 No. 417, No. 418) ある漢譯(宋法護譯大悲陀羅金剛大教王儀軌經、大正藏八九一番。山田龍城前掲書一七一頁及び注²参照) のほか、多數の藏文注釋が残り(I, p. xiii, II, p. vii-viii)、本書第二部に

梵語原文の刊行された *Kāñha* (*Kṛṣṇa*) と *Yogaratnamālā* (藏譜については東北日録 No.1183) もその一つである。チベット佛教においてのタントラが重視されたことと窺われる。

著者はまずチベットにおける佛教と、その大藏經中に占めるタントラの地位に觸れ、タントラに對する世上の非難に答へ、これを一概に佛教の墮落と見なすとの誤りを指摘していく (特に I, p. 3, p. 6-7)。要するに著者の目的は、梵藏文獻を使用してインドにおける佛教の一特殊形態を解明し、その起原の地におけるタントラ佛教の研究に資し、合せてチベットにおけるタントリズムを理解するための基礎をつくるにある (I, p. 2-3)。

現存の H・T は二篇 (*kalpa*) に分かれ、それぞれ十一章 (*pañala*) および十二章からなる。韻文を中心として少量の散文をもじり、傳統的には七五〇頌を多くむとされる。なおその中には若干のアバーハンニャ語の詩節 (II, 4-6, 8, 67, 71, 91-92, 5, 20-23, 68) が混在する。インドの他の作品と比較する問題がいよいよ繰返され、かうした遙かに長い廣本——三三十一篇、五十萬頌 (*Vajragarbhā*) が十萬頌 (*Burston*) ——が存在したと傳えられ、また注釋者ヴァジュラガルバは、しばしば六千頌かのないだといふ根本タントラ (*Mū-*

latantra) を引用している。しかしながらそれはむしろ H・T 本體より新しく、古い注釋家には知られていないかつたと思われる。H・T 成立の過程および年代は、明確に決定できないが著者は傳流の系譜、注釋の年代關係から推論して、八世紀の終りころにはすでに存在したと結論し (I, p. 12-18)、注釋書ヨーガ・ラトナ・マーハーの作者カーンハを、暫定的に九世紀初期の人と認めている (I, p. 14 n.)。

次いで著者は、H・T を中心として、佛教タントラの内容を簡明に記述している (I, p. 19-39)。哲學的基礎は明かに中觀派の空思想であり、龍樹の名はタントラ佛教の傳承に重きをなしてゐる。なお學習の順序として、毘婆沙論、經量部、瑜伽行派、中觀派を擧げ、その上にヒーヴィアシユラを置いていることは (II, 8-9-10)、注目に値する。涅槃と輪廻との根本的一致を主張し、神祕的體驗と感覺的快樂との不離を強調し、しかも左道的色彩の極度に強い H・T においては、その教義はあくまでも男女兩性的原理と配當され、智 (prajñā)= 空性 (*śūnyatā*) = *Nairātmyā* (*Prajñāpāramitā*)、padma 'yoni'、rakta 'blood' および方便 (*upāya*) = 赤 (*karuṇā*) = *Hervaja* (*Heruka*, *Saīvara*)、vajra 'līṅga'、sukra 'semen' などと並んで展開する。

jīā ～説明され (I. 1.7. 本來は he vajra! v. I, p. 10, n. 1)、
 ベーヴァシュラとその配偶ナイラーティヤーとの本源的一致
 を前提として「**歸**」の教理に徹底してゐる。智と方便との合
 一かの菩提心 (bodhicitta) が生じ、一切苦を離脱した究竟
 の目的すなわち大樂 (mahāsukha) に到達する。サンサー
 ラ (輪廻・現世) をほかにしてニルヴァーナなし (II. 4. 32)
 衆生は即ち佛陀なり (II. 4. 69, 73-78) ～斷語するタントラ
 の立場からいは、一切は空なるがゆえにこそ、絶對的眞理たる
 空性に參與し、現實の體験は清濁を超えてそのおおど最高智
 悟證の縁となる。ただしその手段としては、普通のマーガの
 修練にのみ頼らず、修行者 (yogin) と修行女 (yogini) と
 の結合によりて、智と方便との合一を象徴するかく、ヤクン
 コアリズムを恐懼する佛教本來の立場から離れたるに遠く、
 常識を超えて面目を一新する。

タントラ佛教もまたインド宗教の所産であるから、ヴォー
 ダ後期以來普遍化した宗教・哲學的要素を吸收し (e.g. I.
 5.1: Brh. Up. IV. 3. 21-30, I. 5. 11; cf. I, p. 20, p. 28, p.
 35), じつは大宇宙と個體との對比或は一致を強調し、個
 人の肉體的構造を神祕的に説明し、シハムーラ・敷タントラに
 似て、血脉 (nāḍī) やだねの生氣の導管および輪 (cakra) や
 なわち心靈的中心を列擧し、かつこれらに重要な意義を附加

してくる。修行者の個體はそのままに大宇宙を象徴するか
 い、それは内觀による神祕的經驗の場となり、諸尊の配置を
 外面的に具現するマンダラに對して、内面的マンダラ (saṁ-
 vara) が展開され、究極の大樂が悟證される。この外H・T
 はやくおれる實踐的修行、師匠によく四種の灌頂の儀式 (ab-
 hiseka)，これに伴う四種の歡喜・刹那の教義、佛身觀、諸
 種のマンダラ、呪契 (mudrā)、真言 (mantra)、持誦 (japa)，
 種子 (bijā) 等に關する規定・説明ならびにその神祕的意義
 はついて、その概略を知らうとする讀者は、著者による序
 論の一讀をすすめる。H・Tの記述は組織的な順序を追わ
 ず、關連事項が離れた章節にくまれてくる場合が多いので
 前後参照する必要があり、内容の摘要 (I, p. 121-125) と術
 語の説明 (I, p. 131-141) は、讀者に多大の便宜を與へる。

左道の佛教タントラについて、世上の江湖の宿となる修行
 者と修行女との性的行為は、灌頂の規定によくおれ (I, p.
 33-35, p. 42-44)，不潔物を聖餐 (samaya) として飲食す
 るよう (特に I. 7. 21, 11. 8-11, II. 7. 5-13; cf. I, p. 43),
 「穀」 (māraṇa, 特に I. 7. 21-22, II. 1. 6, 8-10, 9. 1-6; cf.
 I, p. 32, n. 4, p. 38) めがた世人に懲忌の憶え起らねやれ。
 ただしかなる儀式による出盤的・神祕的解釋が用意され
 「穀」は關しては特に I. 11. 6, cf. I, p. 36, n. 1)，注釋者

は具體的實行よりむ、その背後にひそむ秘義に重點を移してしまふ。この緩和の傾向を看過する」とはやきないが、少くも原文を字面に即して讀むかぎり、大樂を象徴する性的結合、糞尿・人肉の飲食、殺害行為も、その起原においては實行を予想したものと考えられるを得ない。タントラが佛教發展の一面を代表するとしても、古來インド宗教の表面に現われなかつた通俗信仰或いは下層社會の習俗が、ここに吸收され、反映していることは否定である。タントラ研究の興味の大半はこの點に存する。とにかくタントラの世界においては、神秘的體驗のみが眞に現實であり、最高の目的に導くものである以上、世間の價值は全く逆轉し、道徳の基準は顛倒し (cf. II. 3. 29-30)。忿怒・愛慾の如きを惡徳か、人間の本性に根ざす激烈な心情の發露であるが故に、悟證の手段として重んぜられ (cf. II. 2. 46-51)。善惡・虛實の境界は没却しがれ、正常の論理はその機能を失ふ。

人間は五種の部族 (kula, tathāgatakula) に分類され、

五佛およびその明妃に配屬されるが (特に I. 5. 5-7, II. 4. 16-19, 100-103, 11. 1-9; cf. I, p. 30, p. 128)。ヒンドゥー哲學・宗教・文藝のあらゆる分野に共通する分類癖は、タントラにも強く現われ、五の數のほか、三分法または四分法 (I. 1. 30: evam sarve catvārah) もしばしば使用われてゐる。前述

の jñāne H·T せんねむる三一ギニー・タントラで、五佛の明妃および多くの佛母 (dākini, yogini) が重要な地位を占めてゐる。主尊ベーヴァシヨーハは、その明妃ナイラーティヤーと共に、忿怒を象徴し、ヒンズー教におけるシヴァおよぶデウルガーの怒りぐさ一面に類似してゐるが、神話の見地から特に興味をひくのは、ベーヴァシヨーハのマンダラ (特に I. 3. 1-18, II. 4. 79-88, 5. 1-37; cf. I, p. 29-31, p. 122 sub Reality, p. 126-129) を構成する明妃・佛母の名である。その中だが、Dombī (: domba), Caṇḍālī, Pukkasi (: pul-kasa) のよへど、最下層民の名稱に基いてゐるのがあり、普通ヒンドゥー教の神話に見える女神とは全く趣を異にする。タントラ佛教の興じた社會的背景を示唆してゐる (cf. II. 3. 45, 4. 76; I, p. 10, p. 17, p. 45-46)。ただし著者は、タントラにおける明妃ヒンドゥー教のシャクティと同一視するに強く反対し、その相違に注意を喚起してゐる (I, p. 42, n. 1, p. 44)。

著者は序論の最後の一節 (p. 39-46) が、タントラ佛教の總括的評價において、現世一生の間に佛陀となり得るとする教義に新しい魅力のあることを指摘し、性的結合・人肉食用に關する宗教史的意義を解明するに努め、かつタントラ佛教の陥り易い危險に論及してゐる。著者の見解は終始批判的であ

ると同時に、きわめて同情的で、從來の偏見を是正するに役立つ。しかし、タントリズムがその中核において佛教の一變貌たるを失わないとしても、佛教の他の形態と著しく相違する點を見逃すわけにはゆかない。またその反面、タントリズムの發達の歴史が、インドの下層信仰のそれと密接に關係する點を、過少に評價することも許されない。要するに、タントラ佛教もまたインド精神の一所産である以上、いたずらにこれに反感をもつことなく、その基盤をなした社會の信仰・習俗の研究と相まって解明されなければならない。著者がこの方面的學術的研究に貴重な資料を提供し、さらに多くを提供しようとする熱意に稱讃を惜しまない。本文の筆者は密教の素養を缺き、チベット語の知識に乏しいので、この種の著作を批判する資格をもたないが、あえてこれを一般に紹介したのは、上記の諸點を重要と考えたからである。

最後に出版・翻譯につき一言する。著者は梵文校訂のために三個のネパール寫本を使用し、藏文はナルタン版を基底とし、カーンへの注釋はブルゴール文字の古い寫本（十一世紀後半）に依つてある（II, p. vii）。英譯はできうるかぎり原文に忠實であることを期すると同時に、藏譯および梵藏の注釋書を沿襲して本意を傳えるに努め（II, p. viii-x, c. I, p. 10-11）、適當に字句を補足し、時には簡素化し、詳細な脚注

と相あわせ、一讀して誰にも理解であるように工夫されていいる。ただし漢譯は、藏譯と異なり、原本の字句を追わず、梵文の解釋に資するところが少ないので、若干の場合を除き、利用されていない（II, p. viii）。梵藏文の出版により、今後はむしろ漢譯の正當な理解に、多くの便宜が與えられるものと信ずる。本書に用いられた梵語は、一般に單純な構文を示しながら、正規の文法に照らして不正確な語形・語法に満ちる。II, p. xxi)、類書の用語と合せて「タントリック」と呼ぶのがややねしき。かかる名で呼ぶにしろ、梵語の一種であることは疑ひなく、筆者は梵語學の立場からかえつてこれに特殊の興味を覺える。しかし一般の讀者を煩わすのを恐れ、文法的事實は一括して附録に収めた。この方面に關心をもつ學者の一覽を得れば幸甚である。

附 錄

の性の誤用等に觸れ、韻律も決して常に指針となりうるがどうや、時には全寫本に反して是正する必駁があつたと述べて若干の例を擧げては (II, p.x-xi)。たしかに H・T の梵語は不正規形に満ち、格 (nūnū inst., abl., -tas, loc.) が用法の放漫である以上、令成語の要素相互の關係があつてこそであることは、全篇を通じ、弛緩した梵語の印象を深める。

かしこねの現象は、本書にのみ限られたことではなく、タヒトヨリカルハニハニ回類の文献に共通して認められる、梵語の1類型として被處され、よくあどれる。Cf. L. Renou : *Histoire de la langue sanskritique*, Paris 1956, p. 122-123. Budd. Hybrid Skt. 俗云 Buddha. Skt. ナーヤダヤの々種・範圍・種類等は屬して種々の誤解が可能である (cf. Renou: *Introduction générale*, Göttingen 1957, p. 20-21 cum nn. 81-85)。シカドの Tantric やホーリー梵語の一類型であるか如何、梵語史の觀點からの研究がなれば價値はしつらう。かくの場合はハニヘ類書にわたって資料を集め、比較検討すべきであるが、今は H・T の通讀した際田辺義和の訳書實の中、注四十九の例を提示する。Edgerton: Budd. Hybrid Skt. Grammar and Dictionary, New Haven 1953 (エドガートン EG, ED) 著者 Manjuśrimūlakalpa, Sādhanam-

ālā なども採録し、エドに繋がる文法的不規則形は、悉くん全く EG の中之類例を見出すことができる。簡単を期して、いざりにのみ参照を以ておいた。文法の術語がたゞ短く説明に英語を用いたのがまた簡明のためである。

Sn.= Snellgrove.

I. 梵語。此由古が予期せぬ如きに疑惑者が現われる場合、或はその反對の場合 (EG 3.5 sqq., 3.27 sqq.)。以下の例は韻律から判定されなうの、オペール寫本の書記上の問題に過るだらかの知れず、まだ誤植の疑ふが掛へだる。スカラムナ inst. for ā, II. 2.41, (EG 3.30); parkṣethāḥ (emend. Sn.) 2. sg. opt. for pari, II. 2. 8, 9 (EG 3.38), "kṣasva is also possible, cf. v. I. kṣasya mss. B; tathatāyām I. 5.8 (EG 3.36, ED sub tathatā); abhuvan from bhū, II. 4.68 (prose) (EG 3.46); dvīsañkhyataḥ 'secondly' I. 10.13 (contra met.); sutaraṁ = sutarām II. 5.41; vikṣyā (emend. Sn.) absol. for ḍya, II. 3.23 (EG 3.8, 35.10); kriyate pass. from kṛ, I. 7.21, a contamin. with the ptk. pass. in -iyate?

佛教。音韻はおこしの形態論はおこらず、アベトウハニヤ

詩篇は斯處の外に幾處か。トマーケンラム形ノコトナリ。 Śud-
dhasahāva = -svabhāva ms. A, I. 9. 20; poṣadha = upo-
ṣadha, pā. (u) posatha, II. 8. 9, cf. ED s. v.; Ahomu-
khā 'n. of a goddess' II. 4. 65, cf. adhomukhī (epith.
of Bhūcarī) II. 4. 98; Pukkasi 'n. of a goddess' passim,
v. Index s. v. ラム形ノコトナリ。

nāḍīdvayadvayaikēkā (v. infra 3) yoginyah for °yam
e? II. 4. 24.

ñ a<a+a before a conson. cluster (EG 4.21, cf. 3.32). grāmantāṣṭha- (sic) I.7.17; sopāyanvita- I.8.

49. *H. -**caerulea*

ॐ e<=a+e. ekeka- = pā. ekeka, pkt. ekkekka, II.
4.24 (cit. supra), v. Weller Zum Lalitav. p.41, Renou

Gr. scie p.44: §40 rem., cf. EG 4.21-24, 3.67.

4i -hīno (end of a) utpattyā II. 2. 34 (EG. 4. 38).

१६ sadya rambhā° for °yam̄'ra° II.9.21 (EG 2.72,

ED sub sadyaṁ = skt. *sadyas*).

III 名詞の性。語尾の *h*・*m* などが不注意に混用される *H*・*T* のいときテキストにおいて、名詞の性、いことに男性と中性との限界を、厳格に論ずるいとはやあなし (cf. EG 6.1)

sqq.)° 校註類々 ekākṛti yad divyām II.3.4

ākṛti が中性として扱われているのを、一例として擧げてい

るが (II, p.x), いの場合は ekākṛti を bahuv. と考え

るに私が詰われる。しかしこの例における kula- は明かに

明陞
तथागतानां कुलाः (nom. pl.
m.) te syuḥ II, 11, 8; tāsām api kulās te syuḥ II, 11, 9.

「ヘーヴァジュラ・タントラの批判的研究」辻

kūñdala kañthī ca haste rūcaka mekhala^१ कुन्दला कान्थी च हस्ते रूचका मेखला^२ एवं उपर्युक्त
 एवं स्वरूपः^३ kūñdala-kañthī, rūcaka-mekhalā एवं उपर्युक्त
 एवं sg. dvandva m. f. (EG 23. 3) एवं उपर्युक्त
 एवं उपर्युक्त II. 3. 32 rūpa-śabdās tathā gandho rasa-sparśas
 tathaiava ca, II. 5. 25 : pṛthivī varuṇa-vāyuś ca tejas
 candrārka ca. एवं उपर्युक्त I. 5. 5 : Vajra Padma tathā Karma
 Tathāgata Ratnaiava ca; II. 4. 101 (prose) : Akṣobhya
 Vairocana, etc.; I. 9. 20 : gandha na śabda na, etc.; I.
 10. 33-34 : na ca bhāva na bhāvaka, etc. एवं उपर्युक्त
 एवं उपर्युक्त उपर्युक्त उपर्युक्त II. 3.
 60: padma kakkolañ matañ; II. 4. 59: sarvāsti vāda
 dharmacakre; II. 4. 61: nikāya kāyam iti; I. 8. 21:
 khaṭvāṅga śūnyatākāraih. एवं उपर्युक्त I. 6. 17 एवं उपर्युक्त
 6. 15 एवं उपर्युक्त -bhava (all mss.) एवं उपर्युक्त I.
 एवं उपर्युक्त उपर्युक्त उपर्युक्त उपर्युक्त
 एवं उपर्युक्त (all mss.) एवं उपर्युक्त (all mss.) एवं उपर्युक्त

एवं उपर्युक्त (EG 10. 15-16)^४ siddhi II. 4. 15; Amogha-
 siddhi II. 4. 101 (prose); nirvṛti II. 4. 35, dhitī II. 4. 41.
 एवं उपर्युक्त (EG 12. 13)^५ damarūpāyarūpeṇa I. 6. 12
 (with contraction); śatru I. 10. 34; -dharmadhātu II. 4.
 47.

एवं उपर्युक्त -ā acc. sg. f. (EG 9. 20-22) : cauryakeśa-
 एवं उपर्युक्त

Ni 世間長短量形。

ā एवं उपर्युक्त. -aṁ nom. sg. m. (EG 8. 26) : niraṁ-
 śukam (v. infra x, 1) bhūtvā II. 6. 10. ———-aḥ acc.
 sg. m. (?) : śabdaś ca (all mss., “añ ca emend. Sn, cf.
 II, p. x)……laksayet II. 4. 14. ———o voc. sg. m. (EG
 8. 28) : ekaraso II. 12. 6 (mantra). ———-aḥ nom. pl.
 m. (EG 8. 83) : aṣṭau vidhāḥ prakīrtitah II. 5. 59. ———
 āñ nom. pl. m. (EG 8. 85) : amedhyakijakādyāñ tu
 niyyāñ sukhināḥ II. 4. 74. ———-ā(s) acc. pl. m. (EG
 8. 92 and 93) : aṣṭau (read so) 〈ca〉 kalaś[s tato]
 likhet II. 5. 51. ———-a nom.-acc. pl. n. (EG 8. 101) :
 samāni tulya ceṣṭāni samarasais I. 8. 39, ‘They
 are accepted as being equal and the same by those
 who’..... Sn., ceṣṭāni=ca i? rather tuliyaceṣṭāni (a
 comp., cf. Kāṇha’s comm.) ‘of the equal action for
 those who.....’ (inst. loosely used as often). ———

āñ nom. acc. pl. n. (EG 8. 102) : aṣṭāsyāñ vimokṣā
 aṣṭau (emend. Sn. for “kṣeṣṭau all mss.) II. 9. 12. ———
 prakurvanti II. 4. 94 (prose).

kṛtā (all mss., °tām emend. Sn.) mukutī (all mss., °ṭīm

emend. Sn.)..... yojayet I. 6. 15; —— -ām acc. sg. f.

(EG 9. 16): mahābhāśām II. 3. 55 (cit. supra III in

fine)—— -ā inst. sg. f. (EG 9. 65): Nairātmīyā saha

II. 5. 10; śavakeśasya kuccā ‘with a brush made from

the hair of a corpse’ (Sn.) II. 6. 7. —— -ā nom. pl.

f. (EG 9. 82): etā mudrā susiddhidā (end of a half-

verse) II. 3. 63; yoginyah paramavismayam āpannā ||

(before etām) II. 4. 65 (prose); santrastā avanau

patitā || (before dhiṇa-) II. 4. 66 (prose).

॒ —— -ī 髪筆。 -ī nom. sg. m. (EG 10. 27): ādi II. 4. 20.

—— -im acc. sg. n. (EG 10. 45): akṣīm II. 5. 64. ——

-im acc. sg. f. (EG 10. 59): gatim II. 4. 77. —— -yā

gen. sg. f. (EG 10. 123): avicvā tyājyahetuñā (separate
so) I. 6. 22.

॑

— -ī 髮筆。 -ī acc. sg. f. (EG 10. 54-55): mukutī (all

mss., °ṭīm emend. Sn.) I. 6. 15 (v. supra b). —— -im

acc. sg. f. (EG 10. 44): khecariñ II. 9. 17. —— -ī voc.

sg. f. (EG 10. 41): devī (all mss., devi emend. Sn.)

II. 1. 12; paśya devī mahāratnam II. 9. 8. —— -ī acc.

pl. f. (EG 10. 187): devatī (ms. A, °ti ms. B, °ṭīm

ms. C; sarvadevī or -devatīr emend. Sn., cf. II, p. x)

dīṣṭvā II. 4. 66 (prose).

॑ 髮筆。 -am nom.-acc. sg. n., type nāmām (EG

17. 10): bodhyāga-saptan tu II. 9. 13. —— -antām

nom. sg. m., pres. part.: tariyantañā (mss. A and C;

°yañ ca emend. Sn., cf. II, p. x) surāsurāñ II. 5. 27,

better °yantāḥ su° (EG 18. 6); for -ām for -aḥ cf. supra

2 a. —— -a nom. sg. m., pres. part. (EG 18. 55, -a for

-aḥ EG 8. 22-23, cf. supra 1 a): bhuñjan ācama (em-

end. Sn. for °mana mss. A and C, °manām ms. B)

pūgam bhaksayan II. 2. 5, read perh. ācaman. ——

-ānca nom. pl. m., as -anta for -antāḥ (EG 18. 86):

narakapretatiyānca (°ān ca Sn.) devāsuramanusyakāḥ

II. 4. 73; -tiryām ca, of course, not impossible, cf. EG

15. 3, ED sub tiryā.

△△△ 髮筆の廿四が、額筆たる所以である。出頭の形は髪
筆の如きを含むべき。しかし書記・傳承の體の上、「△△
△△△」髪筆の幅筆筆頭あるか、出頭の圓頭かなどは困難
である。

V. 驚異。

- ि न् कृः kṝ : karet II. 3.18, sāṁskaret I. 2.23, II. 1.
 2, II. 2.18, cf. II, p. xi, to karati (EG 28.18). ——
 grah- : gṛhyet II. 4.39, to *gṛhyati (cf. EG 28.28);
 gṛhma impv. II. 3.16 ('Ina prob. a mispr.), II. 5.47(*bis*,
 mantra), II. 12.1, 3 (*bis*), (EG 28.5, p. 210 sub grah-
 (1) gṛhma-ti). —— jñā- : viñāniyat I. 7.2, the metre
 requiring rather vijā-; jānata 2. pl. impv. II. 3.36, 4.19
 (EG 28.5, p. 213 sub jñā-.(1) jāna-ti. —— diś- : deśeta
 3. sg. opt. II. 8.9 (EG p. 215 sub diś- (3) -deśa-te). ——
 pā- 'drink' : pibayanti II. 3.38 (prose), caus. to pibati
 (EG 38.9, cf. pibyati, etc. EG p. 220 sub pā-). ——
 piṣ- : piṣayet (emend. Sn., v. 1. piṣayet ms. B) I. 2.23
 (prose), cf. EG p. 220 sub piṣaya-ti, piṣa-ti. —— bhr̄- :
 vibharti I. 6.16, certainly graphic for bibharti. ——
 mr̄- : mriyate II. 3.66 = mriyate (EG 3.95).
 ॐ अभुवन् abhuvan II. 4.68 (prose), v. supra I.
 ॐ क्रियते kriyate I. 7.21 (kṝ), v. supra I. ——
 asñiyate I. 7.28, from the pres. stem aśni, cf. -gṛhṇi-
 yeya (EG 37.7).

II. 3.53, cf. EG 25.29, 5.2.

- ि तर्जनीता॒ तर्जयांता॑ II. 5.27, v. supra IV, 2 e.
 —— ācama nom. sg. m. II. 2.5, for ḡman, v. loc. cit.
 ६. 駭長介異。 -yogita- in II. 9.23: vajraḍakiyogi-
 tañ̄, = yojita, yukta, denom. to yoga.
 ८. 駭驥異。 -ya instead of -tvā (EG 35.1, 35.9), cf.
 II, p. xi: gṛhya I. 6.8, II. 2.21; janya I. 2.23 (prose);
 pūjya II. 5.38; vādya mentioned II, p. xi but over-
 looked by me. —— vikṣyā II. 3.23, v. supra I. ——
 gaṇādhyaḥkṣam puraskṛtyām II. 4.12 (end of a followed
 by tatra), -in prob. inorganic, cf. EG 2.74.

VI. 一義 (concord) ◎ 驪異。

१. 蔽。
 a. वाचालयै॒ वाचालयै॑ (EG 5.5)° I. 6.15: pañcabuddhaka-
 pālāni dhartavyayām yogacaryayā; II. 4.24: nādidvaya-
 dvayaikēkā (v. supra II, 1 b and 2) yoginyah kramaśo
 matāḥ. 'The... veins ... are equated with the *yogīnīs*,
 two to each.' Sn.
 b. 驪異の形體・凡て人稱複數の駪異 (EG 25.30)° II. 1.1
 and II. 3.3: deśayantu bhagavān, cf. EG 5.2 but

correctly II. 3. 26 (*bhagavanto*); II. 3. 39 (prose): *bhagavāṁ tuṣṭe sati* (incomplete loc. absol.) *adhiṣṭhānam darsayanti*; cf. also *bhagavān bobrūta* II. 3. 53 (v. supra V, 4); II. 2. 52: *eka eva mahānandaḥ pāñcatāṁ yānti bhedanaiḥ*, a semantic attraction to *pāñcatā*.

. 2.
性

१.१.३ (prose): त्रिपि (all mss., tisro em-
end. Sn.) नाद्याः (EG 6.16); १.८.३०: अनन्दानान्
कास्त्रानां (EG 6.19).

पूर्वोत्तराम्बिकी^० II.2.45 : devatāyogarūpam.....
vyavasthitāḥ (EG 6.12); II.3.33: yuktaḥ śad etānīn-
driyāni ca.

३ इति ॥ 2.19: māsam ekena ‘in one month’ (EG 7.5), cf. māsam ekañ II. 2.16; II. 6.10: utsṛṣṭāpavitraṇa bhakṣayet samayan tataḥ. ‘One should eat the

sacrament in its soul and impure form. See.

VII. 合成語。構成要素相互の関係が明瞭でなく、他の單語との論理的關連があいまいな例は甚だ多い。古典文學に見られる端正な構造を離れること遠く、前後の關係から意味を推定しなくてはならない。例えば、II. 5. 43: *āyutajāpa* (em-

end. Sn.)-spaṣṭena dirghanādena cāruṇā ‘By 10,000 recitations in a clear, pleasant and sonorous tone’, (Sn.) 般若波羅蜜 spaṣṭa- 般若波羅蜜 cāru- 慈愛 nāda- 音響 → II. 4. 55: sambhogam bhūjanam (= bhojanam) proclaim saṃnām vai rasarūpiṇam. ‘*Sambhoga* is enjoyment which consists in the six kinds of flavour.’

Sn. はよこて、意義上 *ṣanñāna* が *rasa* の翻訳である (EG 23. 11)。ついで多數の例を挙げることを避け、次に合成語前分の語形の變化を例示するに止める。

1. 長母音の短縮。

a -a for -ā (EG 9.6); *Nairātmya-yogini* II.3.52, 4.25, 47, 65, cf. °yā-yoginī II.8.6 (prose); *Nairātmya-rūpinām* II.4.40, -rūpakanī II.4.99, -sukhadayakam II.5.29; *lajja-kāryām* I.6.23, cf. *vridā-kā*I.6.18; *nānā-HŪM-kā-ranispanna-* (read so) II.1.5, for *nānā*. Inversely -ā for -a (EG 3.5): *yogāvit* II.11.11 (contra met.!).

II. 6. 10.

ni traya-for tri: I. 2. 20 (p. 8, 5, prose): trayahastām manḍalam trayāṅguṣṭhadhikām (read so), cf. I. 10. 5: trihastām m° kāryam trayāṅguṣṭhadhikan tu.

VIII. 格の用法。一般に構文は簡素であるが、細密がある。

緊密性を缺く、むしろ放漫な流れてる。格の用法も本来の領域を逸脱し、古典文法の基準で律するには似つかない。校訳者は次の特殊な用例に注意を喚起している。I. 3. 2: nyāsam (= nyasyet) akṣaram, I. 6. 4: bhakṣanām dasārdhāṁritām (I, p. 67, n.). Nomen actionis が他の謂釋名詞と組合せられ、後者を objective gen. の價值ある語句と解される。EG 7. 16 でややこしい點は極めて多い。I. 10. 22: dhūpam 格の用法の複雑さが、一層お露わる。I. 10. 22 : dhūpam dipam tathā gandham aṣṭakalaśādibhir yutañ (sc. manḍalam acc.) とある。あるべき形をもつて dhūpena, etc. など觀る。校訳者せめだ、「the mixture of nom. and inst.’ といふ體の (II, p. x), 次の例も露わる。

II. 3. 54: hasitām cekṣanābhīyān tu ālingām dvandakais tathā ‘As for the smile, the gaze, the embrace and the union’ (Sn.). さて sociative inst. す、 saha が am playing with you’.

准のやうな難題から来る誤解も見出される。何様だいに acc. が非起る體か。e.g. II. 3. 47: pūtisurabhi jalāśrg bodhicittena (‘together with semen’, = -cittam) bhakṣayet. ただしこの例はむしろ inst. の釋明を主とする (Reichelt Awest. Elementarb. § 427) の誤認か知られる。

次に若干の例を擧げる。

i. Nom. pendens (EG 7.13): II. 9. 3: māraṇām kriyate kṛpayā... | śāsanāyāpacārī ca gurubuddhasya nāśakah. ‘Such slaying is done from compassion, ... (and is directed against) those who bring harm to the doctrine or injure one’s guru or other buddhas.’

Sn.; II. 2. 34: utpannabhāvanāhino (sc. yogah?) utpat-tvā kim prayojanām, if the reading -hino is correct; the regular sandhi would require -hīna, i.e. -hīne.

ii. Akk. for the loc. (EG 7.23): II. 4. 15: vyastaku-lam bhāvanāyogān na siddhi (v. supra IV, 1 b) nāpi sādhakah, ‘within the wrong family’, (Sn.).

iii. Inst. absol.: II. 5. 13: tvayā (sociative) mayā... ... kriyatā (emend. Sn. accord. to Kāpha). ‘While I am playing with you’.

4. Gen. with pūj- 'honour' (EG 7.69): II.5.60:

āśām pūjayed yogī; II.7.11: pūjayed nirbharam tā-sām. —— with ni-as- 'place': II.7.9: yoginīnām tato nyaset. —— with mr̄ṣ- 'not heed': II.3.26 (prose): atha sarvayoginīnām bhaginīnām nr̄ṣitvā (= marṣayitvā in sense). 'Then, begging all the yoginīs to have patience', (Sn.). —— with pā- 'drink': II.3.48: ślesmasiṅghāpākānān tu miśrikṛtya pibed vrati. —— with the causative: II.5.61: tāsām pāyayed yogī. 'The yogin should cause them to drink (it);' II.4.37: madanām pāyayet tāsām (all mss., tasyām emend. Sn.; the context requires the sg., but the loc. would be equally bizarre).

最後に拙の傳統の從へ照述する。 -aka+acc. (cf. Pāṇ.

II.3.70) の例を擧げよう。 II.4.77: imām gatim ajānakāḥ (EG 22.6, ED sub jānaka). もと佛教梵語の転用だ表現、 yena.....tena 'where.....there' (EG 7.32) は、 II.3.40 (prose) は、 いわゆる。

IX. 時・地の用法。現在形または規定を示す願望法をもつてむ單純な文章、或ひは人種形をもつてもも nominal sen-

tence が大抵お出でになります。 説・説義の二つに一形が置かれた際の意味をもつておられます。 II.4.75: na buddho labhate 'nya-

tra. 'No buddha is found elsewhere' (Sn.). 次の文はおこりません。 説のアーティヤー形式が置かれた際の意味をもつておられます。 II.4.75: na buddho labhate 'nya-

tra. 'No buddha is found elsewhere' (Sn.). 次の文はおこりません。 説のアーティヤー形式が置かれた際の意味をもつておられます。 II.4.75: na buddho labhate 'nya-

tra. 'No buddha is found elsewhere' (Sn.).

X. 説の意味。 運行 (bijā) (運行 = hūm = Hevajra-Heruka, a = Nairātmyā) の類。 善 I.2.2, 6, II.4.20-23, 5.28; I, p.26-27, p.32, p.36-37, p.50, p.57, n.1; Index sub

'seed' 「種子」、 もと佛教梵語の農耕 ('aham', 'evam' と 種子 =) I, p.131-141; Glossary, p.143-149; Index

十の體へド根長ノロ。

一

縦幅

(saṁdhvābhāṣa, v. supra III, 14) ~ 言
saṁdhābhāṣa ‘language intentionnel’ Filliozat L’Inde

class. II, p. 593). — 縦幅 II. 3. 56–60 言語の縦幅

多數の言語。本文中縦幅の用法を述べる。次に
秘語を列舉し、秘語の意味する縦幅を記す。

II. 3. 56: madana- n. = madya- ‘wine’, II. 4. 7 (apabh.),
37, 5. 61, 6. 9, 7. 12, 11. 13. 15. — bala- n. = māṁsa-

‘flesh, meat’, II. 4. 7 (apabh. baru), 5. 61 (bala-śālija),

11. 15. — malaya- n. = milana- ‘meeting’, II. 4. 7
(apabh.). — kheṭa- m. = gati- ‘going’, II. 4. 8 (apa-

bh.); from which meaning of kheṭa-? Sn. gives

‘hide?’ but cf. ED s. v., Mayrhofer Et. Wb. I, p. 311.

— śrāya- m. = śava- ‘corpse’ II. 4. 8 (apabh. sarāba).

— nirāṁśuka- ‘naked’ n. = asthyābharaṇa- ‘bone-

ornament’, II. 4. 8 (apabh.), 6. 10 (“kāṁ bhūtvā ‘ador-

ned with the bone accoutrements’ Sn.), 10. 2 (“kais”).

II. 3. 57: preikhaṇa- n. = āgati- ‘coming’, II. 4. 8

(apabh.). — kṛpiṭa- n. = ḍamaruka- ‘drum’, II. 4.

6 (apabh. kibida), 5. 30, 54; a RV-word! ‘Gesträuch’

x. 28. 8, cf. Mayrh. s. v. — dundura- adj. = abhvaya-

unworthy’, II. 4. 7 (apabh.), 7. 3, 8. 8. — kālījara-

adj. = bhavya- ‘worthy’, II. 4. 7 (apabh.).

II. 3. 58: dīṇḍima- adj. = asparṣa- ‘untouchable’, II.

4. 8 (apabh., = Dombī, cf. I. 5. 18). — pādmabhājana-

n. = kapāla- ‘skull’, I. 8. 20, II. 5. 31, cf. padmabhāṇḍa-

‘skull’ II. 3. 48. — trptikara- n. = bhakṣa- ‘food’;

— mālatindhana- n. = vyāñjana- ‘herbs’, II. 4. 7

(apabh.), 7. 10.

II. 3. 59: catuhṣama- n. = gūtha- ‘dung’, II. 4. 7

(apabh. causama), 10. 4. — kastrikā- f. = mūtra-

‘urine’ II. 4. 7 (apabh. kacchuri), 10. 5. — sihlaka-

‘frankincense’ n. = svayāṁbhu- ‘blood, rakta’ (cf.

svayāṁbhūkusuma- ‘blood from menstruation’ II. 3.

48), II. 4. 7 (apabh. sihā), 10. 4. — karpūraka- n.

= śukra- ‘semen’, II. 4. 7 (apabh. kappura), in the

form karpūra- II. 4. 13, 27, 38, 40, 5. 60, 11. 15, comp.

with sihla- II. 2. 18 (cf. I, p. 90, n. 2), 4. 36, 8. 4; synon.

of śukra- (cf. I, p. 25, Index s. v.); bodhicitta- e.g. II.

2. 18; akṣobhya- I. 1. 15, 2. 23; candra- I. 1. 15, while

praījā= raktā, cf. I, p. 49, n. 1; bindu- II. 3. 14; amṛta-

II. 4. 39.

II. 3. 60 : sālijā- or sālijā- n. = mahānāmsa- 'human flesh', II. 4. 7 (apabh. sālinīja), 5. 56, 61 (cf. bala-supra), cf. rājāśali- 'special flesh' II. 7. 10 (cf. I, p. 115,

n. 3). —— kunduru- n.=dvindriyayoga- 'union of

two indriyas', II. 4. 8 (apabh.), I. 10. 38, II. 2. 33 (-ja-), 52, 3. 17, 38 (prose), 4. 38. —— bolaka- n. = vajra-

'linga', II. 4. 6 (apabh. bolā=yogin), —— kakkolaka-

n. = padma- 'yoni', II. 4. 6 (apabh. kakkolā=yogini);

bola(ka)- alone II. 2. 25, 4. 50, 5. 38, 62, 6. 1, 11. 13 (bolavān = yogin); kakkola(ka)- alone II. 2. 56, 4. 30 (stri-kā°-sukhāvatyām); both together I. 10. 38 (only in ms. C) : bolakkakloyogena kundurum kurute vrati

(cf. vairapadmasanyogāt II. 5. 49 and the like, mantha-manthānayogataḥ II. 5. 48) II. 2. 24, 53, 3. 28, 4. 38, 5. 15, 63, 7. 1; synon. of padma (beside bhaga-and kakkola): evam-kāra- II. 4. 56 (corresp. to yoni- in 52, but in fact = nābhi-, 'in the navel' Sn.), 90, kapāla(ka)- I. 6. 17, 7. 28, II. 5. 5, 6. 1, kinjalika- II. 2. 25, ghanṭā- II. 3. 13, sukhāvati- II. 5. 2 (cf. II. 4. 30 cit. supra).

ナーディー nādi= nara, gādi= go, hādi= hastin-, antaśva= aśva, ādiśva= śvan- II. 11. 8 (cf. I, p. 86, n. 2), II. 10. 5 (prose).

迦摩羅° adhyānta- in -krūracitta- 'whose mind is extremely ferocious', Sn. II. 5. 46; formation? — avasava- 'right', savyāvasavya- I. 3. 18 (prose), —— āli- 'vowels' and kāli- 'consonants', each with doctrinal implications, v. Index sub 'Āli and Kāli', cf. ED s. vv.; phonetic terms antastha- 'semi-vowels', uṣman- 'sibilants and h', śūnya- 'anusvāra' occur in II. 9. 15 sqq. (cf. I, p. 117, n. 2), while om̄ is variously designated: vairocana- II. 9. 16, etc., mohakula- i.e. vairocana- 22, varṇādhipati- 17, varṇeśvara- 20, varṇajyeṣṭha- 21, vedānām ādimain 18. —— Arolik-, °ka= Amitābha I, p. 61, n. 4: "a vrddhi form of arola 'unrowdy'", but 'lic ca I. 5. 12 shows its stem as °lit. —— ka- 'head' (lex.) II. 4. 60: ke= śirasi (Kāñha). —— kakkhāṭatva- 'hardness' II. 4. 79, 87, cf. ED sūb kakkhaṭa-, °tva- —— kacadori- 'keśaraj-

jū' Kāñha, ka^o dvivetā 'the two-stranded cord of hair'
 Sn. I. 6. 16. —— karoṭa- 'skull' II. 5. 55. —— karti-
 I. 3. 18 (prose), karṭr̄, kartṛkā, kartī 'knife', from
 kṛt- 'cut', v. Index sub 'knife', cf. variakartari-vidhi-
 'the ritual of the vajra-knife' Sn. I. 2. 22. —— kuc-
 cā- 'brush' II. 6. 7. —— kurpara- 'thigh' II. 11. 13. ——
 —— khin̄khirikā- 'fan' II. 5. 32. —— carmāra- 'a low
 caste' II. 3. 45: ḍomba- canḍāla-ca^o-haḍḍikādyān duḥs-
 parṣān. —— cauryakeśa- 'ubdaddhakeśa' Kāñha,
 I. 6. 15: -kṛtāñ mukutīñ (emend. Sn., cf. supra IV, 2
 b, d) yojayet. 'He should arrange his piled-up
 hair as a crest.' Sn., cf. I, p. 65, n. 1: caudakeśa. ——
 cendakāra- 'a low caste' II. 4. 76 (v. I. canḍak^o ms. B).
 —— chandoha- and other words for 'meeting places'
 (v. Index s. v.) I. 7. 10-18, cf. I, p. 68, n. 1, p. 69, nn. 1
 and 2. —— charda- 'sickness' I. 10. 33, cf. chardi-
 —— chomā- 'sign' I. 1. 8, 7. 1, cf. I, p. 66, n. 1. ——
 jaga= jagat- I. 9. 20: sarvavīśuddhyā śuddhasahāva
 (v. I. svabhāva ms. A) jago (nom.) jaga manye, jaga
 prob. voc. 'oh world, in my opinion', differently Sn.
 'Ah, I know the world', cf. I, p. 81, n. 1. On jaga- v.

EG 15.1 and 2; one of many examples of themat-
 ization, e.g. uṣma- 'heat' I. 6. 7, vyāghra-carma- II. 7.
 8, tiryā- 'animal' II. 4. 73 (if Sn.'s reading is to be
 adopted, v. supra IV, 2 e); by adding -a, esp. -rūpiṇa-,
 I. 10. 32: tattvam.....jnānarūpiṇām, II. 4. 30, 40, 55, 103,
 5. 11, 78, 7. 8, cf. II, p. x; vikarālina- 'distorted' II. 5.
 12. On the contrary upādhvāyin= ^oya, nom. ^oyī II. 4.
 62. —— jalāṣrj- 'spittle' II. 3. 47. —— jvalacīvara-
 'yellow robe' II. 4. 61. —— devati- = devatā II. 4. 66
 (prose): sarvadevati (ms. A, -devīr or -devatīr Sn.,
 v. supra IV, 2 d) dr̄ṣṭvā, cf. ED sub devati. ——
 dvandaka- 'sexual union' II. 3. 54, cf. dvandvatatraka-
 II. 3. 11, mahādvandvasamāpatti. II. 5. 16. —— dhvaja-
 'a man who has been hanged' I. 7. 21, cf. I, p. 71, n.
 1, p. 72, n. 4. ——dhr̄k-=dhr̄t-, vajra-dhr̄k-=dharma-
 (I, p. 140 and Index s. v.), techn. 'the name by which
 the master addresses the pupil during the rite'; I.
 8. 16: karṭr̄-kapāla-dhṛk-karāḥ 'their hands clasping
 the knife and the skull'. —— naraka- 'skull' II. 5.

52, -sthā- II. 6. 7, mahā- II. 7. 12. —— niyatām=nit-
 yam 'always' I. 6. 14. —— nirvṛtāy-ate den. 'is

recognized as *nirvāṇa*' II. 4, 34, cf. *nirvṛti* = *nirvāṇa*. I. 4.35, I. 5.13 ("tas), v. ED sub *nirvṛta* and "ti. — puttali-m. 'eye' I. 11.1, 2. — *prāṇivandha*- 'killing of living-beings' II. 6.4, prob. graphic for -bandha, then cf. *paśupandha*. — *mahāmadhu*- 'collyrium', II. 7.2: -*masin* *kṛtvā*. — *moṭana*- or *ā-mo* 'pressure' I. 5.20: *aṅgulyāmoṭanām*, "yā mo° or "yāmo°, 'the pressure of one finger upon another' Sn. — *yukti*- 'connection, argumentation', gramm. term, cf. Renou Terminologie gramm. sub *yukta*, I. 3. 16: *śvasatīty anyāya yuktyā śmasānety abhidhiyate*. This quasi-etymology implies the equation *śvasati* 'he breathes' = *śavasati* 'resting-place of corpses' as Sn.'s transl. shows and presupposes the interpretation *śma(n)*- = *śava*- (cf. Nir. III. 5; *śma* *śariram*, H.W. Bailey RO 21, 1957, p. 66-69). Esoterically *vaira*- means abheda- and *sattva*- means tribhavasyaikata, then it is said I. 1.4: *anyāya prajñayā yuktyā vajrasattva iti smṛtah*, 'by this argumentation, that is, true knowledge, ('because of this device' Sn, cf. I, p. 47, n. 3); simil. I. 5.8: *tathatāyām gataḥ śrimān āgataś ca*

tathaiva ca | anyāya prajñayā yuktyā tathāgato 'bhidhiyate || On the other hand II. 4.88: *taya yuktyā 'in that same manner'* = *tēnāva nyāyena ibid.* has no etymological reference. — *rishi-kā*- 'soap-berry tree' II. 10.2. — *lekhanyā*- 'pen' = *lekhani*- II. 7. 2. — *vajra*- as simplex or as a member of a compound very often used in our Tantra which professedly belongs to the Vajra-family in various meanings and nuances (cf. I, p. 140, and Index s. v.). *vajrin-* usually meaning *Hevajra* or *guru* (*vajraguru*, *vajrācarya*) can denote in pl. *kāya-vāk-citta*-, II. 9.15: *netraśuddhis trivairinām*, 'The eyes symbolize the three vajrins', cf. I, p. 28. — *vāyasāguru*- 'sweet aloe wood' II. 8.4. — *vidarbhitā*- 'adorned (with a letter)', *hūn-phat-kāra-vi* I. 2.4 (prose), *phat-kāra-vi* II. 9.35, cf. ED sub *vidarbhayati*. — *vidā-vidyā*- II. 3.67: *svasamayavidām prāpya*, 'having gained this knowledge of his own sacramental nature' Sn. — *vināyaka*- 'obstacle' (lex.) I. 4.90 beside *vighna*. — *vṛṣ-* trans. 'suck' II. 5.62:

naranāśikān, cf. II. 11. 12: vṛṣṇaīn naranāśayāḥ. —
vyāñjana- 'herbs' II. 3. 58 as the secret meaning of

mālatindhana- (v. supra). — saptāvara- 'a man
of irreproachable conduct who has returned seven

times to human state' I. 7. 21 beside dhvaja- (v. supra),

II. 9, cf. I, p. 87, n. 1. —— samputa- 'sexual union',

II. 6. 2, 'the human complex' II. 9. 1, cf. I, p. 116, n. 3.

— singhāñaka- 'mucus of the nose' II. 3. 48. —

svayairimbhu- 'blood' II. 3. 59 as the secret meaning of

sīhlaka- (v. supra). —— haḍqa- 'bone' II. 10. 3:

asvahaḍḍena. —— haḍḍika- 'a low caste, a sweeper',

II. 3. 45, cf. carmāra- cit. supra. —— hēṭh- with vi-

'have contempt' II. 11. 8: jantavo..... no vihēṭhyāḥ,

cf. ED sub vihēṭhayati.

(慶應義塾大學教授)

『現代史におけるイスラム』と題する本書は、一九五〇年代を過いで、最も注目されるべき西ヨーロッパ研究の著書の一つである。これまで一般的に、西歐のイスラム學は、イスラム神學＝法學形成期の古典イスラム時代の研究を中心に行なった成果を擧げて来たが、近代、現代におけるイスラムの發展の研究領域は未開拓であつた。むしろ西歐的イスラム學の常識からいって、イスラムの近代的發展を取扱うことは異端視された、ところが差支えないとあつた。やへだくとも、第一次大戰後に漸く、現代のイスラムの研究がアメリカで促進されねど、西歐イスラム學界のこの傾向が田立つてゐる。

この著者はその意味で、異端兒である。一九四〇年代はじめ、イラン・イスラムにおける近代思想の發展、およびイ

カーネギーハーバード・セントラル・スクール・オブ・アーツ
「現代史におけるイスラム」

Wilfred Cantwell Smith; Islam in Modern
History, Princeton Univ. Press, 1957, xi, 317 pp.

加賀谷 寛